

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	BC性の受け継ぎについて
Author(s)	石岡, 精三
Citation	ニダバ , 20 : 19 - 28
Issue Date	1991-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047216
Right	
Relation	



BC 性の受け継ぎについて

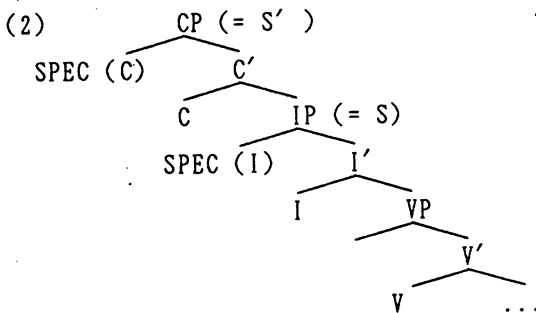
石 岡 精 三

0 はじめに

一般に $[\pm N, \pm V]$ なる素性に基づいて規定される範疇は語彙範疇と呼ばれ、このような素性によって決定されない範疇は非語彙範疇と呼ばれる。名詞 ($N [+N, -V]$)、動詞 ($V [-N, +V]$)、形容詞 ($A [+N, +V]$) と前置詞 ($P [-N, -V]$) は語彙範疇に属し、屈折 (I と略記)、補文標識 (C と略記) と指定辞 ($SPEC$ と略記) が非語彙範疇に属する。Chomsky (1986, Barriers 理論と略記) の X バー理論によると、任意の語彙範疇 X が与えられると、より上位の範疇 X' と、更に上位の最大範疇 (最投投射) X'' (XP) が得られる。

- (1) a. $X' = X \quad X P^*$
 b. $X'' = X P^* \quad X'$

この投射プロセスは、(1) の型式を非語彙範疇 (具体的には I と C) にも拡張することにより、 S' は基本的に (2) のように展開される。¹⁾



Barriers 理論は、移動に対する境界理論 (下接の条件 (Subjacency)) と統率理論に関わる事象を同一の「障壁」 (barrier, bar. と略記) 概念を用いて統一的に取り扱うことを目指す点で画期的な理論である。²⁾ しかしながら、重大な問題点を内包する理論でもある (詳細は後述)。この問題点は、一律に I がその sister である VP を L 標示しないと考え、これに関連して必要となる VP 付加が想定されることに由来すると考えられる。本稿は、石岡 (1990a) と同様に、 VP 付加を全廃する方向での考察であり、当該付加操作に代わるプロセスを提案する。具体的には、ある一定の構造情報と実現情報に関する条件

が満たされた場合に、I がその sister である VP を L 標示すると考える。加えて、本稿では、Wh 要素の移動に関連して、IP の「阻止範疇」性 (BC 性) の受け継ぎが発動、あるいは停止するプロセスが考察される。³⁾

1 Barriers 理論の問題点

Barriers 理論が内包する問題点は、一律に I がその sister である VP を L 標示しないと前提することに起因すると考えられる。(3) を検討する。

- (3) a. [_{CP}how_i[_{IP} did you [_{VP}fix the car t_i]]]
 b. [_{CP}how_i[_{IP} did you [_{VP1} t_i¹][_{VP2} fix the car t_i]]]
 c. *[which car]_idoes [_{IP}John wonder[_{CP} t_i¹ whether [_{IP} Mary fixed t_i]]]
 d. *how_i does [_{IP}John wonder[_{CP} t_i¹whether [_{IP} Mary [_{VP}[v' fixed it] t_i]]]
 e. ?*what_i do you believe [_{NP} the claim [_{CP} t_i¹ that John [_{VP} bought t_i]]]
 f. *how_i do you believe [_{NP} the claim [_{CP} t_i¹that John [_{VP}[v' bought it] t_i]]]
 g. *who_i did you [_{VP}[v' meet her] [_{PP} before [_{CP} t_i¹[_{IP} interviewing t_i]]]]]

長谷川 (1986) が指摘するように、(3a-b) に関し、t_i は VP に直接支配された位置にある。また、この t_i を直接支配する VP は I の sister であるため、L 標示されない (VP=bar.)。この VP の bar. 性は直接上位の最大範疇 IP に受け継がれる (IP=bar.)。t_i と最終着地点上上の how_i との間には2つの bar. が介在することになる。結果として、付加語痕跡 t_i が Subjacency と空範疇原理 (ECP) に抵触するため、(3a) は非文 (*) と予測される。これは事実と合致しない。この不備を打開すべく、Barriers 理論では VP 付加が用いられる (3b)。VP₁ は I の sister であるが、最大投射でなくその分枝にすぎないため bar. を構成しない。また、直接上位の最大範疇 (IP) に bar. 性を伝えることもない (VP₂ も同様に bar. を構成しない)。結果として、how_i の始発移動と後続移動が Subjacency と ECP を満足し、(3b) は適切に文法的と予測される。(3b) 文法性を説明するために援用される VP 付加は、(3c-g) が全て文法的と予測することになる。Barriers 理論では、(3c-g) の文法性判断 (?*, *) を説明するために特別な bar. (extra bar.) を設定する。例えば、N の sister である CP、最も深く埋め込まれた有時制 IP が bar. を構成すると考える。更に、統率にのみ関与する最小条件による bar. がある。しかし、この extra bar. の設定は bar. 定義体系からはみでたものであり、ad hoc な感を免れないであろう。⁴⁾

後述するように、(3c) において、埋め込まれた節 (embd. CP) 中の I はその sister である VP を L 標示しないと考えられる (embd. VP=bar.)。この VP の bar. 性が直接上位の最大範疇 IP に受け継がれる (IP=bar.)。結果として、t_i の位置から t_i¹ への移動は Subjacency に抵触することになる (2-subjacent) (t_i は、V (fix) に適正 (θ) 統率されるため ECP を満足する)。

2 VP 付加の代替操作

VP 付加を全廃する本稿では、例えば (3a) の I が VP を L 標示すると前提する必要がある。(3a) の I は、*did* として語彙的に実現されている。語彙的に実現された I がその sister である VP を L 標示すると考える (L 標示機能を有する I を I^{lex} と表示する)。⁵⁾ また、疑問文生成に共起する *do* は母型節 (matrix CP) に限定される。本稿では、一般的に matrix I が I^{lex} と前提して論を進めることにする ($I^{lex} \dots$)。

- (4) a. how_i did you want want [_{CP} t_i^1 [_{IP} PRO to [_{VP} fix the car t_i]]]
 b. do you know [_{CP} when_i [_{IP} Tom arrived t_i]]
 c. how_i did Tom say [_{CP} t_i^1 (that) [_{IP} Jane [_{VP} solved the problem]]]
 d. how_i do you think [_{CP} t_i^2 (that) [_{IP} Mary said [_{CP} t_i^1 (that) [_{IP} Tom left t_i]]]]
 e. *what_i did Tom complain [_{CP} t_i^1 that [_{IP} Jane bought t_i]]

(4a) で観察されるように、*to* で語彙実現された I の場合も I^{lex} と考えなければならない ($I^{lex} \dots$)。そうでないと、 how_i の始発移動が Subjacency と ECP の双方に抵触し、非文と予測されることになる。embd. I がある条件下で I^{lex} である必要がある (4b)。⁶⁾ また、matrix $I^{lex} \dots$ の機能がある条件下で embd. I に受け継がれる必要がある (4c-d)。(4e) が示すように、ある条件下で matrix $I^{lex} \dots$ の L 標示機能の受け継ぎを停止する必要がある。一般的に V は、それが下位範疇化する有時制節のタイプ ([-Wh] CP、[±Wh] CP、[+Wh] CP) に応じて分類される (それぞれ、 V^1 , V^2 , V^3 と略記)。matrix $I^{lex} \dots$ の機能受け継ぎに関し、動詞範疇 V は有時制 [-Wh] CP、あるいは [±Wh] CP を下位範疇化する V (V^{-Wh}) と、有時制 [+Wh] CP を下位範疇化する V (V^{+Wh}) に分類される。matrix I^{lex} がより下位の CP 中の I にその機能を伝えるのは、matrix V^{-Wh} の下位範疇化する有時制 CP の SPEC (C) 位置が空、あるいは痕跡要素が実現される場合と、matrix V^{+Wh} の下位範疇化する有時制 CP の SPEC (C) 位置に顕在的な、つまり痕跡でない [+Wh] 要素が実現された場合に限られる。この過程は、一種の照合と同定できる (以下で、照合操作として言及)。これまで設定された仮説によると、(4a-d) 中の全ての移動 (始発、後続) は Subjacency と ECP を満足する。つまり、当該文の文法性を適切に予測する。同時に、(4e) をも文法的と予測する。(4e) の matrix V は非架橋動詞である ($V^{-Wh} \dots$)。つまり、matrix V が非架橋動詞の場合、matrix $I^{lex} \dots$ の L 標示機能が embd. I に受け継がれないと前提することにより、(4e) の非文性は適切に予測される (始発移動経路上の VP と IP が bar. を形成し、当該文は Subjacency に抵触する)。以上の観察から、仮説 A が導かれる。

仮説 A : (a) I^{lex} は、その sister である VP を L 標示する。

(b) 照合操作が成立する場合に限り、matrix $I^{lex} \dots$ の機能は、matrix V が下位範疇化する有時制 CP 中の I に推移的に受け継がれる。

但し、matrix $V^{-Wh} \dots$ に関しては、受け継ぎが阻止される (S 構造)。

仮説 A は、(3) の文法性判断を適切に予測する。(3c-f) の emb. I は I^{lex} と指定

される。つまり、始発移動経路上に複数の bar. (VP と IP) が介在する。(3g) の始発移動経路上には bar. が存在しないが、後続移動経路上で PP, VP, IP が bar. となる。”)

3 Wh 要素の複合移動 (統語移動 (S 移動))

(5) について検討する ((5) は Grimshaw (1986) による)。

- (5) a. [which book]_i did the students forget [_{CP}who_j [_{IP}t_j wrote t_i]]
 b. [which book]_i did the TAs tell the students [_{CP}t_i'that they shouldn't forget [_{CP}who_j [_{IP}t_j wrote t_i]]]
 c. *[which book]_i did the students forget [_{CP}who_j t_j told them [_{CP}t_i'that [_{IP}Dorothy Sayers wrote t_i]]]
 d. *[which book]_i did the students forget [_{CP}who_j t_j asked/told them [_{CP}who_k [_{IP}t_k wrote t_i]]]

仮説 A により、(5) 中の I は全てその sister を L 標示する。常に IP の BC 性が上位範疇 (CP) に受け継がれるとすると (CP=bar.)、(5a-d) は全て非文と予測されることになる (t_i に関する始発移動、あるいは後続移動が Subjacency に抵触)。これは、明らかに事実と合致しない。そこで、以下の仮説を設定することにする。

仮説 B : Wh 要素の複合移動において、それぞれの (準) 始発移動経路が包含関係を形成する場合に限り、IP の BC 性受け継ぎが発動しない (S 構造)。*)

(5c-d) と異なり、(5a-b) では、それぞれの始発移動経路が包含関係を形成する。仮説 B は、適切に上例の文法性判断を予測する。同様に、仮説 B は、(6a) の非文性を予測する。(6b) は、文法的と予測される。仮説 B は、不適切に (5c) を文法的と予測する (両

- (6) a. * who_i do you remember [_{CP}what_j [_{IP}t_j [_{VP}saw t_i]]]
 b. ?* what do you remember [_{CP}who_j [_{IP}t_j [_{VP}saw t_i]]]
 c. * what do you wonder [_{CP}who_j [_{IP}t_j [_{VP}saw t_i]]]

移動経路が包含関係を形成する)。これは、I^{'**} の指定を制限する仮説 C により打開されるであろう。

仮説 C : Wh 要素の複合移動において、始発移動経路が包含関係を形成する場合に限り、同一の I は I^{'**} の受け継ぎによる I^{'**} の指定を拒否する (S 構造)。

仮説 C もまた、matrix V (*remember*) が V^{-wh} であるため、(6b) を誤って文法的と予測する ((6b) の (?*) は後述する)。

4 項の LF 移動

次に、LF 移動について考える。最初に、優位性効果 (7a-b) と純優位性効果 (7c-d) の事例を検討する。従来、優位性効果は ECP で説明される。純優位性効果の場合は、ECPでの説明が不可能と考えられている ((6e-f) は、May (1985) による)。ここで、両優位性効果を説明すると思われる LF 移動に関する仮説を設定する。

- (7) a. who_i t_i saw what_j (→ [_{CP}2what_j [_{CP}1who_i [_{IP}t_i saw t_j]]])
 b. *what_i did who_j see t_i (→ [_{CP}2who_j [_{CP}1what_i did [_{IP}t_j see t_i]]])
 c. who_i does John expect t_i to read what_j

- d. *what_i does John expect who_j to read t_i
 e. ?whom_i did you tell t_i that Harry saw who_j
 f. *who_i did you tell whom_j [t_i 'that Harry saw t_i]

仮説 D: (a) 項の Wh 要素は SPEC (C) 位置に一時停止しない。

(b) 適正統率 (ECP) は、適正先行詞統率に一元化される。

(c) Wh 要素の LF 移動は、CP への付加移動である。

(d) Subjacency が発動しない。

(e) LF において、LF 移動の始発移動経路と S 移動の (準) 始発) 移動経路が包含関係を形成するか、overlap しない場合に限り、IP の BC 性受け継ぎが停止する。

(7a) と異なり、(7b) の両始発移動経路は包含関係を形成しない。(7b) の LF 移動は、matrix IP の BC 性が受け継がれ (CP_i=bar.)、ECP に抵触する。(7c-d) の相違も同様に説明される。⁹⁾ 仮説 D は (7e) を文法的と予測する。しかし、(7f) の両始発移動経路が overlap しない。結果として、(7f) が誤って文法的と予測されるという問題が生ずる。しかし、従来の理論と同様に、LF において項の中間痕跡が削除されていると考えることにより、この問題は解決可能である。つまり、LF では、t_i から embd. SPEC (C) への移動経路と embd. SPEC (C) から最終着地点への移動経路が Union を形成することになる (この Union 形成による移動を準始発移動として言及する)。この前提により、LF おける両移動経路は overlap するが包含関係を形成しない。つまり、(7f) は非文 (*) と予測されることになる。

次に、複合 Wh 要素の LF 移動について検討する。(8) で観察されるように、単純 Wh 要素と複合 Wh 要素の LF 移動には顕著な相違がみられる。

(8) a. what_i did [which man]_j see t_i (cf. (7b))

b. what_i does John expect [which man]_j to read t_i (cf. (7d))

仮に、複合 Wh 要素である *which man* が単純 Wh 要素である *who* と同じ振る舞いをすると考え、(8) は共に非文と予測されることになる。ここで、名詞的な複合 Wh 要素が DP を構成すると考える (名詞的な単純 Wh 要素は NP を構成すると考える)。¹⁰⁾ また、例えば *which man* の *which* は SPEC (N) の位置にあると前提することにする。これらの前提により、*which man* は一挙に最終着地点に LF 移動する必要がなくなる。つまり、基底生成された位置から SPEC (D) への移動が始発 LF 移動を構成する。結果として、(8) の両始発移動経路は overlap しない (IP の BC 性受け継ぎが発動しない)。つまり、(8) は適切に文法的と予測されることになる。このように考えると、複合 Wh 要素が (純) 優位性効果を回避することが説明されるであろう。

次に、(9) で観察される相違について考える。単純 Wh 要素と複合 Wh 要素が同じ移動経路をたどると考えると、この相違は説明できないであろう。

(9) a. *what_i does John know who_j (t_j) wrote t_i

b. [which book]_i did the students forget who_j (t_j) wrote t_i

c. who_i did you tell whom_j [_{CPT_i}² that Tom said [_{CPT_i}¹ that Harry saw t_i]]

この場合もまた、単純 Wh 要素と複合 Wh 要素の相違を勘案する必要がある。つまり、LF 移動と同様に S 移動でも、複合 Wh 要素は DP を構成し、その始発移動は基底生成された位置から SPEC (D) への移動と考えなければならない。¹¹⁾ 最初に、(9a) を検討する。 who_i が embed. SPEC (C) の位置にあると考えた場合、両始発移動経路が包含関係を形成する。(9a) は仮説 B によって文法的と予測される。一方、 who_i が基底生成された位置、つまり SPEC (I) 位置にあると考えた場合、 who_i は matrix CP に LF (付加) 移動する。しかし、LF において、両始発移動経路は overlap するが包含関係を形成しない。そのため、IP の BC 性受け継ぎが発動し、当該文は ECP に違反することになる。石岡 (1990a) は、これを共鳴構造 (resonance structure) によって説明する。これは、複数考えられる派生構造の文法性判断が互いに干渉しあい、それぞれの派生構造に対する文法性判断の中間項的な判断が生み出されると考える (厳密には、(9a) は (?*) と予測されるであろう。この意味で、共鳴構造原理は Stowell (1989) の優先派生 (preferred derivation) の原理と対立する)。

一方、(9b) は、どちらの派生構造でも文法的と予測される。 who_i が SPEC (C) 位置にある場合、仮説 D は当該文を文法的と予測する。 who_i が SPEC (I) 位置にある場合、仮説 D は当該文を文法的と予測する。LF において、複合 Wh 要素の始発移動経路と、それに直結する後続移動経路が Union を形成しない点に留意されたい。仮に、LF において Union を形成するとした場合には、(8) の文法性が説明不可能となる。一方、単純 Wh 要素の場合は、LF において、Union により準始発移動経路が形成される。S 構造における複合 Wh 要素の Union 形成の場合と同様に、単純 Wh 要素の Union 形成が始発移動とそれに直結する後続移動に限定されるか否かは、(9c) の文法性判断による (当該文の調査は未実行)。¹²⁾ (6a-b) について検討する。前述のように、embed. who_i が SPEC (C) 位置にある場合、(6b) は文法的と予測される。一方、当該 Wh 要素が共に SPEC (I) 位置にある場合、仮説 D は当該文を非文 (*) と予測する (→共鳴構造原理)。一方、(6a) の $what_i$ は SPEC (C) 位置を占める (この場合、 $what_i$ は LF 移動しないと考える)。よって、(6a) は適切に非文 (*) と予測されることになる。

5 付加語の LF 移動

付加語は、指示的付加語 (*when, where*) と非指示的付加語 (*why, how*) に分類される。

- (10) a. * $what_i$ did you buy t_i why_j
 b. * $what_i$ did you buy t_i how_j
 c. $what_i$ did you buy t_i where_j
 d. $what_i$ did you buy t_i when_j

指示的付加語と非指示的付加語が同一の構造位置を占めると前提すると、(10) の相違は説明不可能である (仮説 D は (10) を全て非文 (*) と予測する)。¹³⁾ 大庭 (1990) は、

指示的付加語が基底において NP であると仮定する。単独で副詞として用いられる *when*, *where* を $[_{PP}[_P' [_P(P) NP]]]$ と分析する (PP の主要部が空 (P) である点に留意されたい)。この分析を採用すると、(10c-d) は適切に文法的と予測される。つまり、LF での指示的付加語の始発移動は、基底生成された位置から SPEC (P) へのそれと考えられる。結果として、LF における $what_i$ と $when_j/where_j$ の始発移動経路は overlap しないことになる (IP の BC 性受け継ぎが発動しない¹⁴⁾)。これまで設定された仮説群は、以下の (11) を説明しない (仮説 D により、(11) は全て文法的と予測される)。

(11) a. * $who_i t_i$ believes Harry why_j ((11a-c) は、May (1985) による)

b. * $who_i t_i$ believes that John came why_j

c. * who_i does Mary believe $[_{CP}t_i' [_{IP}t_i$ left early $why_j]]$

(11) は大庭 (1990) の理論でも説明不可能と思われる。また、Pesetsky (1982) の移動経路理論を修正した May (1985) でも説明されない。¹⁵⁾ 前述のように、例えば (11a) において、 why_j は、LF 移動によって who_i が生起する matrix CP に付加される (上のような、 why_j と who_i による付加構造 (CP) の形成を Absorption として言及する)。 who_i と why_j が基底生成される位置が共に X' 範疇の sister である点に留意されたい。統一的に (11) の非文性を説明するためには、これまで設定された仮説群以外の説明原理を導入する必要がある。

仮説 E : X^n 範疇 ($n=0,1$) に対して、同位の構造位置を占める Wh 要素間の Absorption と、LF 移動経路の Union は発動しない ($n=0$ の場合と異なり、 $n=1$ では、範疇 X の類別が関与しない) (LF)。¹⁶⁾

この仮説は、以下の (12) の相違を説明する。LF において、(12a-b) の両始発移動経路は包含関係を形成する ((12) は、Stechow & Sternefeld (1988) による)。

(12) a. it is unclear $who_i t_i$ thinks (that) we saw $whom_j$

b. *it is unclear $who_i t_i$ thinks (that) who_i saw us

be unclear が V^{*Wh} と前提することにより、*embd. I* は $I^{*ex...xxx}$ と指定される。¹⁷⁾

(12a-b) は、S 構造における如何なる規制にも抵触しない。LF では、前述のように、仮説 D は両文を文法的と予測する。一方、仮説 E は (12a) を文法的、(12b) を非文と予測する。結果として、(12a-b) の相違は、仮説 D と仮説 E によって説明可能となる。

最後に、(13) の相違を検討する ((13) は、May (1985) による)。

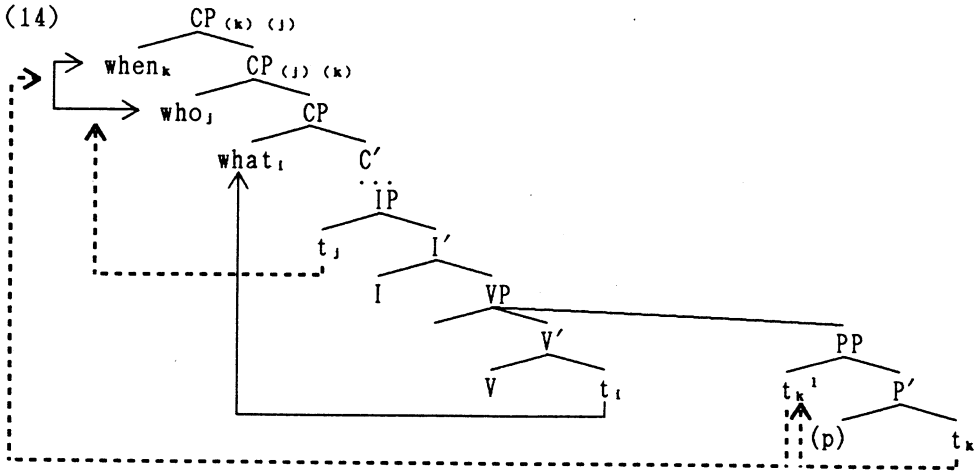
(13) a. * $what_i$ does who_j admire t_i

b. ? $what_i$ does who_j admire t_i $when_k$

c. * $what_i$ does who_j admire t_i why_k

(13a) は優位性効果の事例であり、仮説 D によって排除される。May (1985) は、(13b) の文法性判断 (?) を LF 移動する who_j と $when_j$ に関する移動経路の Union によって説明する。しかし、(13b) を説明する論法は (13c) の非文性を説明できない。¹⁸⁾

本稿でも、この LF 移動する複数の Wh 要素に対して、経路の Union を前提することにする（この場合の Union 形成は、始発 LF 移動だけでなく、後続 LF 移動にも適用される）。



$when_k - who_j$ の移動経路の Union と $what_i$ の経路は包含関係を形成する。¹⁹⁾ 仮説 D と仮説 E は、(13b) を文法的と予測する。(13c) では、仮説 E により、LF 移動する Wh 要素に関する移動経路の Union が形成されない。また、Union 形成が可能だとしても、S 移動経路と包含関係を形成しない。つまり、(13c) は非文と予測されることになる。

6 結語

以上で、構造情報のみでなく実現情報をも勘案した仮説群が設定された。また、移動経路理論による BC 性の受け継ぎに関して若干の検討を加えた。本文中、あるいは註の部分で指摘したように、この仮説群は更に検討すべき問題点を内包する。これらの問題点を検討した上で、本稿の仮説群を修正すべきことはいうまでもない。最後に、これまでの仮説群によって説明不可能と思われる事例をあげる（(15) は、Reinhart (1981) による）。

(15) $when_i$ did you do $where_j$?²⁰⁾

註

- 1) (1) の型式をを非語彙範疇とされる C と I だけでなく、限定辞 (D と略記) にも適用する可能性も考えよう。つまり、従来指示的用法の名詞句 (NP) を D の最大投射と考えることも可能であろう (cf. Stowell (1989), Brame (1982), Fukui & Speas (1985))。本稿でも、この可能性が追求される。
- 2) つまり、Barriers 理論は境界節点に言及しない境界理論の構築 (換言すれば、境界節点の因数分解) を目指すといえる。しかし、実際には最小条件を設定することによって統率にのみ関与する bar. を設定する。また、Barriers 理論では説明不可能な事象に対して、bar. 定義から逸脱した *ad hoc* な bar. (extra bar.) が設定される (後述)。

- 3) bar. の特定に必要な定義体系に関しては、Chomsky (1986) を参照されたい。IP の BC 性の受け継ぎとは、BC を構成する IP によって、その直接上位にある最大範疇 (CP) が bar. となる事象である。
- 4) 石岡 (1990a) では、extra bar. を設定する必要がない。更に、最小条件の適用も C (that) が主語痕跡 (*t*) と隣接する場合に限定される。
- 5) I がその sister である VP を適正 (語彙) 統率する、つまり、I の語彙性に立脚した議論が、Zagona (1988) である。
- 6) 当該 CP の SPEC (C) 位置に顕在的な Wh 要素 (演算子)、あるいは空の演算子が生起する場合の I はその sister である VP を L 標示すると前提する (I^{'**..**'})。
- 7) (複合) 名詞句内からの Wh 要素移動については、石岡 (1990a) を参照されたい。
- 8) 移動経路とは、移動要素が通過する最大範疇の連続を指す。始発移動に限り、X' 範疇も経路に含まれる。初項が同一の経路は、包含関係を形成しないと考える。
- 9) (7c-d) の matrix V (*expect*) は、S' (CP') 削除動詞に属す。本稿では、S' 削除を C の削除と前提する (C) と標示)。また、主要部が削除された最大範疇は、下位にある範疇の BC 性 (bar. 性) を受け継がないと考える。よって、(7d) の LF 移動では、matrix CP (付加構造を形成するより下位の CP) が bar. となる。
- 10) Stowell (1989) と同様に、指示的用法の NP と複合 Wh 要素 (NP) に対して以下の [D_F SPEC (D) [D' [D [N_F SPEC (N) [N' [N...]]]]] の構造を前提する。
- 11) (9) の matrix V (*forget, know*) は共に同じ部類の動詞に属す (V², V^{-Wh})。よって、S 構造において *who_i* は SPEC (C)、あるいは SPEC (I) の位置にあると考えられる。後者の場合は、*who_i* が matrix CP に LF 移動することになる。
- 12) 本稿の (5b) もまた、何れの派生構造でも文法的と予測される。(5c) では、*who_i* が SPEC (C) 位置にある場合が非文 (*), SPEC (I) 位置にある場合が文法的と予測される。(5d) において、*who_i* と *who_k* が共に SPEC (C) 位置にある場合が非文と予測される。他の場合の文法性判断は、これまで設定された仮説群で説明不可能である (これに関する考察は他の機会にゆずる)。
- 13) 本稿では、付加語が一般的に VP に (直接) 支配されると前提する (指示的付加語の構造位置に関しては後述)。また、項の Wh 要素の場合と異なり、付加語の Wh 要素は SPEC (C) 位置に一時停止すると考える。
- 14) V' の sister である PP は、一般的に bar. を形成する。S' 削除の場合と同様に、主要部が削除されている最大範疇は、bar. を形成せず、また、より下位にある最大範疇の bar. 性 (BC 性) を受け継ぐこともないと前提する。
- 15) May (1985) は、(11) を説明するために移動経路理論に加えて Modification Principle を提案する。
- 16) 仮説 E によると、本稿 (7e) の *t_i* は V の sister でないことになる。つまり、間

接目的語が基底において V の sister である分析には問題があることになる。

- 17) *be unclear* が V^{-wh} と前提すると、問題が起こる。この場合、LF において、より浅い *embd. I* の $I^{1' \dots 0'}$ の機能がより深い *embd. I* に受け継がれると考えなければならない(詳細な検討は、他の機会にゆずる)。
- 18) May (1985) は、(13c-d) の相違の原因が不明であると言う (p.168, note 11)。
- 19) この場合の Union 形成が発動する場合、(S) 移動経路上の X' 範疇が削除されると考えなければならない(この問題に考察は、他の機会にゆずる)。
- 20) (p) の sister である Wh 要素の場合には、Absorption が可能となる旨の修正が必要であろう。

参考文献

- Baltin, M. R and Kroch, A. S. eds. (1989) *Alternative Conceptions of Phrase Structure* The University Press of Chicago, Chicago and London.
- Brame, M. (1982) "The Head-Selector Theory of Lexical Specifications and the Nonexistence of Coarse Categories." *Linguistic Analysis* 10-4 pp. 321-325.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Fukui, N. and Speas, M. (1985) "Specifiers and Projection." *MIT Working Paper in Linguistics* 8 pp.128-172.
- Grimshaw, J. (1986) "Subjacency and the S/S' Parameter." *Linguistic Inquiry* 17 pp. 364-369.
- 長谷川欣佑 (1986) 「Barriers 批判」 月刊『言語』15-12 pp. 84-94, 大修館, 東京.
- 石岡精三 (1990a) 「VP 付加の代替操作について」 長岡技術科学大学 『言語・人文科学論集 4』.
- May, R. (1985) *Logical Form, Its Structure and Derivation* MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- 大庭幸男 (1990) "Multiple Wh-Questions: Alpha-Marking and absorption Condition." 平河内健治 (篇) 『生成文法の方位』, pp. 115-137 松柏社, 東京.
- Pesetsky, D. (1982) *Paths and Categories* Doctoral dissertation MIT, Cambridge, Mass.
- Stechow, Arnim von and Sternefeld, W. (1988) *Bausteine Syntaktischen Wissens*. Westdeutscher Verlag, Opladen.
- Stowell, T. (1989) "Subjects, Specifiers, and X-Bar Theory." in Baltin, M. R and Kroch, A. S. eds. (1989) pp. 232-262.
- Zagona, K. (1988) "Proper Government of Antecedentless VP in English and Spanish." *Natural Language and Linguistic Theory* 6 pp. 95-128.